

頭書
大 全
世 界 國 畫

北亞米利加洲

四

ル 2
393
4



門 伊 2
398
卷 4

藏書

東洋學
北亞米利加



古論武子

千四百年代の未利足
の伊太里古論
武士といふ人
羊の毛績ぐ貪り

世界圖説卷四

北亞米利加洲

亞米利加は西の極

新世界を以て

横たふ事北馬良

尾崎岬より南の瀨

東洋學

家の子かそーゲ航
海の術と心得其志
を所九人ふらげ
獨を自から考ふる
小世界の状圓きや
へ東北方は印度か
どの土地は西
の方小も必む地方
ゆるるをとして説と
立西班牙の王小説

戸の麻濃蘭一長
さ四百二十餘里北
みまろ二天海北理
の續ハ巴拿馬た
地峡の長二千餘里

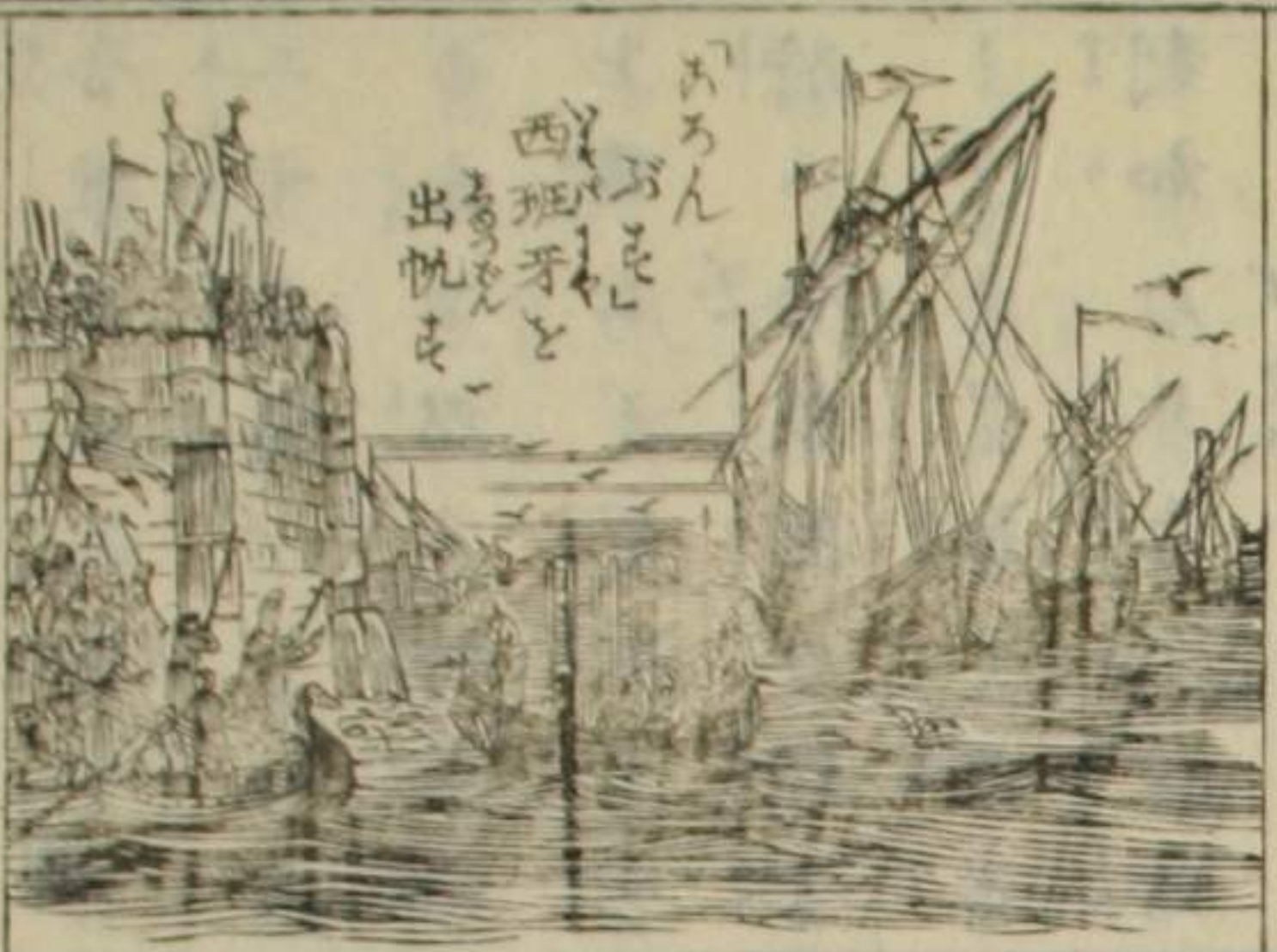
き王妃の助を以て
船三艘と仕立西一
方とさして乗出せ
小果一々陸地と
幾明一うを頃ハ千
四百九十二年即ち
我明應元年かま
もよを歐羅巴諸國
の人類小往來して
りた地面と見出し

東のろろ名河多羅
海一子廻まらる乎
海一西たろ日本
まら北五米利加渡
海一厚保留仁屋

見出を不隨ひ本國
 人を移して新
 地を開闢し得る所
 の利潤も多し土地
 の模様小由り地理
 此學者ハ此を南
 北二大洲小介ち又
 亞細亞阿非利加歐
 羅巴と旧世界とい
 ひ亞米利加と新世

北亞米利加の西の隅
 あり北亞細亞領
 の大洋あり北
 五百餘里世界を三
 此港より東西二

界ともいふ



○魯西亞領の亞米
 利加ハ唯土地の廣

此の地を度付
 此の人其僅を以て
 其業を教く此地
 人の標漁樵の
 其のす人其業を

きのもて産物も
少く慶應三卯年
合衆國の政府七百
二十五萬ドルら
の金と以て此土地
と残らざ買取を當
時ハ合衆國の領介
とすき都て亞米
利加の北方小住居
民土人ハ名多し

具理陰蘭土伊漢
蘭土と乃本王
北極と紀寒帶
の冬多氷を積る
雪也氷の百も
多

もうといふ人種
て身の長五尺不足
らも通用の文字も
なく人物甚るる愚
ある寒國の所とか
まバ穴藏小住居
て衣食共小きか
一或ハ氷と層立て
穴藏とすさるも
ゆを

吹雪り噴火山実小
極一紀系色なり
美吉利領の亞米利
加北極海の邊
南極の鄰る合衆國



北亞米利加以南
 其一分は地
 多水と北名不毛地
 荒涼なる人氏僅十
 八萬處をてる人々家

又「いんぢやんと
 人種は即ち亞
 米利加の土人種と
 ハのこのことあり昔
 ありんばは亞米
 利加を見出せし前
 此國に住つる
 者おて開闢以來の
 亞米利加人なれど

多々無知又盲目の
 氏は南東は金田
 の地氣候次第不利
 人多く好む
 みるは境は湖水

も其性質殺伐
て文字と知ら
さだめ一家も
山阪と徘徊一
と以て獸と殺
と喰ひ皮と着
涯と渡り者
羅巴人の亞米
へ移りしより
種と追拂ひ都
會の

ろくろ流るる河は老翁
海河の畔の喜別久
ふ築建たる碇屋は
金城湯池乃く入る
し世の流るる亞米利加

地へ出ると許さ
追々其人の數も減
少さるまよ

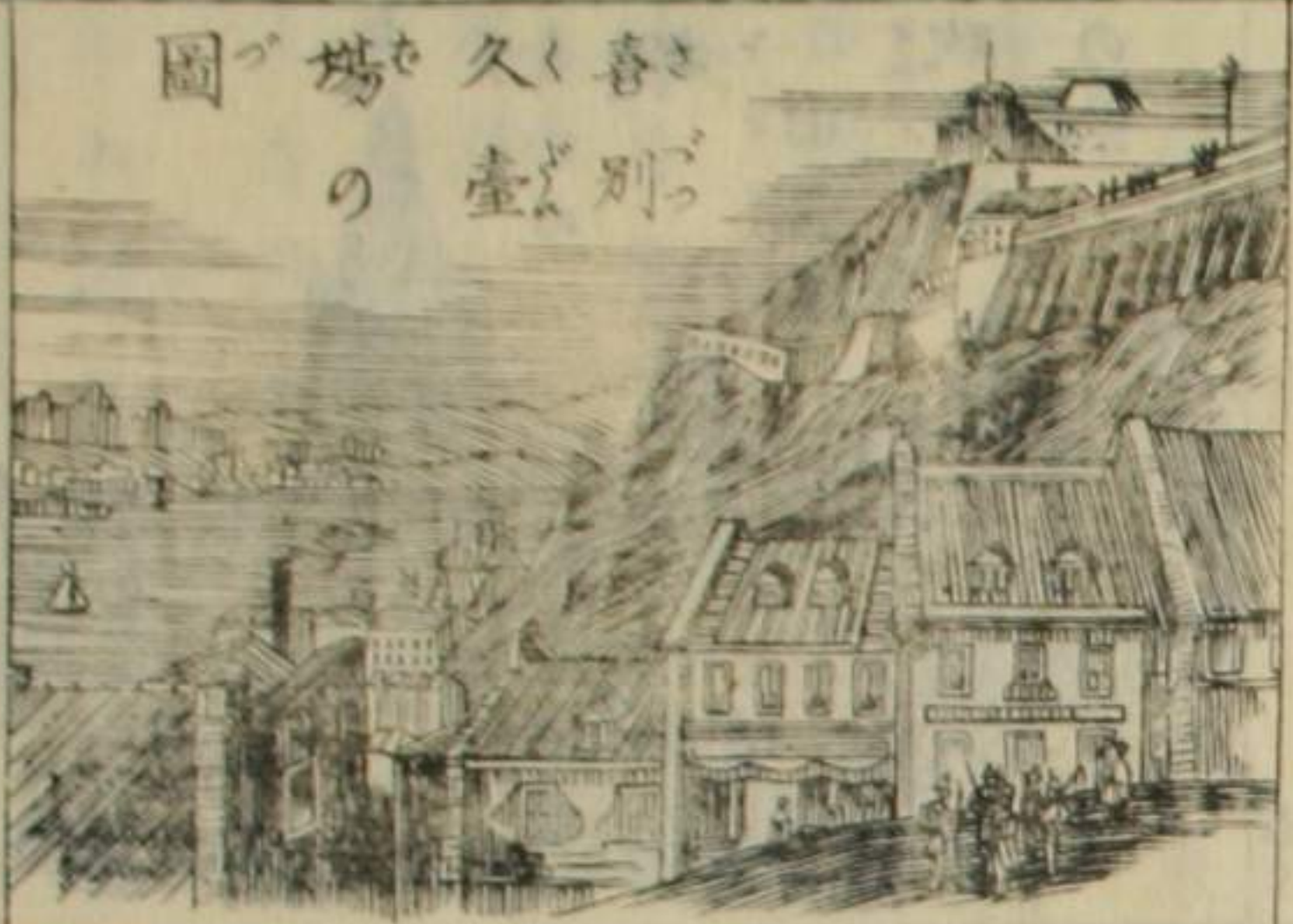


の治部良苗多苗
此多入るる河の流
潮門出里苗を河
中の流るる軍
交易場西より上る

○金田の地ハ近來益々繁昌して諸愛小學問所も多ク往來の便利ハ蒸氣車並ニ湖水小浮べり蒸氣船ハ高賣の道も甚く盛なり西洋人の説ハ此地も行々ハ英吉利の手を離れて獨立を

小田羽河とみみまこ小田羽府を英吉利國の代友所北北極西方ハ太平洋海の小濱も之を北の香ハ何

喜久の別壺の場



又ハ合衆國へ歸して一の政府と

多羅海新見の國
如果まゝ一
梅。總奉行北亞米
利加一英吉利能
威勢以振ふ根本



○前小もい一三如
く亜米利加洲と見
出せし後ハ歐羅巴

金田地亦此所傾
なり
昔天のふと土地廣
く平土の深と民多
一億の好く奴生

の諸國しを家と移
一三百年むくの
間小人別も追々増
今合衆國の東
海岸の地ハ英吉利
の領分あて人の産
業も繁昌さる小付
本國の政府しを運
上を取上げんとせ
一お領分の町人百

雲出れ象大富強弱
質不肖と乃越其
多於耳目鼻口
四枝の官是非曲直
を分別し善より從ふ

姓どもせいどの言こと分わか不ふ億いっ
兆せうの人民じん天地てんちの間ま
は生なまも貧富ひんふ強弱きやうじやくの
別わかみやゆらん男おとこハ
男おとこ一人ひとりか女をんなハ女をんな
一人ひとりなり他人たにんの妨まげ
と為なささくもハ亦また他
人たにんを妨まげげらるる
の理ことか今いま此地このちハ
居ゐて銘々めいめいの家業けがふと

本心ほんしんと學まなぶまむ才さい
能のうき一ひと種しゆ無類むるい万物ばんぶつ
の空そらをとりて具そなへて天てんの性せい
可べ古こ不易ふえき以もつ一ひと大義たいぎ
之これ海うみ以もつ骨ほね力ちから一ひと才さい以もつ

營いみ銘々めいめい共ともの申合まを
せ小こく國こく中ちゆうの取締しと
を行おこな届とどき本國ほんこくの世よ
話わを受うけどとも自みづか
から一國ひとこくを治しらるる
けの覺悟かくごゆる愛あいつ
政府せいふに色々いろくの命いのち
と下くだし謂いひかゝ運うん
上うへを取立と立たんとハハ
らざる世話よと為なす

役やく一ひと人ひとの執とつ我われ儀ぎ
も此こゝに到いたる心こゝろ成なる
我われ自由じゆう天てんの道理だうり
其その國こくに報ひゆる
丹心たんしん以もつ滅めつする一ひと才さい

て下々の家業と妨
ぐるのミから人
の物を奪取て上の
用と達せんとも
不埒の舉動かまた
この國王政府の命
しをともみせと兼
知し難しとして孫々
以て獨立の旗揚ふ
多事
變定せし頃ハ千七

如不羈獨立乃誓を
留ん
北亞米利加の十三州
乃本國の政府より
威光を以て示し

百七十五年即ち我
安永四年



名標
わんてん

英の本國より軍
勢と差向け威光と
以てあせと鎮めん

下る存たたれ其税
以て告げん
多事
便多し民を備
天然の自由を越え
小日し威光を以て示す

とを色でも亜米利
加人ハ固う必死
小覚悟定め老若男
女獨立の師と聞て
悦むざる者なく町
人ハ天秤棒と持て
市より起る百姓ハ
鈕釦と携へて畑よ
を耻出さかどの勢
りきバ中々穩便の

遺恨多る遺恨多る
恨より老を頼む
所ハ天地の理に在る
あ、永々年の秋十
三海に及代人罕士

扱出来七十七百七
十五年四月十八日

ふ愛の小戦かて始
て血と流し五月小
ハぶえけり山は戦
争の全みきう一
國の騷乱とありわ
一んとんと推して
惣大将と為し翌年

以速判状世界一示
を檄文の英吉利王
の罪状責免自
建し一合衆國武
器兵糧之に民

七月四日ハ四十
八士獨立の擧げと
布告して人氣益振
ひ昼夜の戦争或ハ
克ち或ハ負け千辛
万苦其有様ハ筆ハ
盡し難し人の誠心
天の恩恵遂ハ勝利
と得て英吉利と和
睦結び國政を定て

數多の敵を海を越
え新軍を引替へて
有る極端飛龍の
勢を松を巻を撓すぬ
鉄石の心は海を越

共和政府と建てわ
るんとんと大統領
の職小任して一大
國の基と開ききり



國の免死を生命
得る自由心理屈し
し生れんと李國を報
る死に片し一死決
し七年の月の日

此度亞米利加の
帥の起るハ誰一
人として頭取も
國中の一般小
獨立と望む婦人小
兒に至るまごも其
氣象と備へまごも
とかれを英吉利よ
りさし向たる官軍
の勢ふても克ぶる

以收守知勇義の名
子多歳一泣く血
乃河骨の山七十七載
の報難え消し忘
大勝利目如度り

一みとせりづ一既
小戦争の起る以前
のめとあをがふそ
とんといふ愛ふて
折しも冬の日町の
子供大勢お雪と
集り家と作を達磨
とあいらつとど
て戦き居るを一處
官軍の歩兵来り

「英吉利」と和睦結
び新條約を束縛
き政を体ありて主君
ありて天下れり
下なり四年交代乃

何心かくあまを妨
げしんと度々かそ
しうバ子供等大小
憤ふて英吉利の
將軍がいの外出
も所と待受け將
軍へ訴ふとゆを
と呼びけし小將軍
のぞ笑ひ汝等も親
小謀反と教へられ

大統領上院の院の評
議役一國中の便不
便議り定先一法律
の威、行を水極に
以才之進む王の富百

て笑へ来しやと
いし子供等ハと
くそれ氣色かく將
軍とあつてつけ我
々共ハ人の指圖受
けて参りし者ハ以
らむ今日將軍へ訴
ふるも余の義から
む我等嘗て官軍へ
對し失禮せし覺ゆ

工製作商賣は英吉
利王と肩並し文教
校藝學校を佛蘭西
國以有し以地土を
以る産物ハ穀獸類

世界圖説卷四 十四

唱一更小取合差
等と謀及人
笑て答へど却て我
乱暴と止むも
を妨げし由に其
の氷を破て人の樂
は達磨を踏崩し池
の自から作し雪
人々謂もなく我等
のらざりし歩兵の

綿燵を葡萄菜実
甘露金銀銅鉛鉄石
炭凡世間の日用なる
物一も不足あり衣
食を逐ふ人欲情求

圖役の人へ告む
も矢張同様の族抄
の之昨日も雪の家
と毀ちしはと既小
三度小及べ最
其終さし置き難く
思ふ小付此上ハ唯
大將軍の裁判と仰
ぐのこも恐も憚る
所もかく辨説明ら

先得易き活計哉
大なる人ハ器よき
日よ多き月之増
人口云々有得者新
地并農者あり

か小述のまけはバ
いトもその氣象不
感心一流石亞米利
加の自由の風小浴
した小兒等勇ま
し心か以後不
時を歩兵のらバ
必仕置を命しと
てとの舉動と譽て
返せとの話の至

漸く利く國堺東
西一子三百里北と南
七百三十三海
の年傾ん今も乃敷三
倍一三六州並



合衆國の東海岸ハ
八世留久の外子

立つと乃中心を和
新頓府の一軍
政事堂高さ二百八
十尺御門樓閣山魏
とと結構明

かふもそんふひら
でうひやむちり
ふ等数多の都會
の文學技藝盛不
して器物製造商賣
繁昌の模様ハ英吉
利佛蘭西小異から
南の諸州ハ米
麥綿烟草等の産物
多一都て東北諸州

とて海を西の黄
獨立一威を
いり大玉の議政為
政の源ありまハ
大を道理あり和
新



政事堂の圖
おん府

ハ商賣を勉め南方
を農業以勵といふ

頼より北の方百里
屋を八女留久人
口ん二百五十中一
乃交易市場を
美吉利の論政府

市中遊園の景



かきわうふやの金山ハ固くは世界第一の此合衆國

てん徳御たり西
海岸の島
保留仁屋、金の甲斐
永三年事始たり
海を建たり

の領分ハ金銀銅
鉄の出る處甚多
何れも蒸氣仕
の道具を用て巧
盡一日本の金山
ハ大小異あり

人戸倍々増殖
たるは稲を金山の
業のたるとり牧田



金山の穴の模様

畑百の職業
北く太平

○女喜志古ハもと
 西班牙の領カ多ク
 一ガ千八百二十一
 年獨立して合衆政
 府と建てて千八百
 六十四年佛蘭西小
 攻滅され佛の差國
 小マキマキコトヤ
 んと以ふ人と立て
 國帝とふセーガ僅

海ノ海岸ノ北ノ界
 女喜志古ノ北ノ界
 合衆國南東ノ横
 女喜志古ノ北ノ界
 女喜志古ノ北ノ界

二年小して慶應三
 卯年國中又乱きて
 新帝と殺し



中亞采利
 加ノ界ノ南北
 凡ハ百里東西ニ百
 三十里ノ只ハ百二十万
 土地ノ生々々々々

先き一ありを出さ
金額の中不最も多
きハ銀あり東洋諸
國へ其通用銀と積
出日本外洋銀
と唱ふるものえ矢
張めき一ありのぞ
らりなり
女喜志古の西海岸
小赤保留古とてよ

物を衣食に用
不足あり用はあ
す金と銀世界中
之種あり富と利
困り源は汲とん竭



き港り里飛脚船か
どハ必ぢりり一立
寄りり

如淵か北と政府の
基田より民の信
仰淡くしそ志あり
政治海より沈る
國の乱民乃軍化

○中亞米利加之諸國も元ハ西班牙の領有カレ一ガ千八百二十一年本國の手を離れて暫くの間に女喜志古小與ミ一二年を経て獨立の政府トカレ其後又各國相分きて各合衆政府を建て

一 遼東
「女喜志古のみまゝ
了く教箇國中亞
米利加之地味上
授自立の体有る

産物ハ金銀銅鉄材木藥種多一
○古論武子亞米利加之發明せ一以前歐羅巴人の往來して地理風俗を知りて遠ハ唯其本國の道傍ハ伊須蘭土阿非利加洲の北岸小亞細亞荒火

刻して互に各々は
各守り力なく被我
田力有約束一合
は有る一被せ
以唯可なり勢を流

屋の海岸を遠方
ハ後印度のミ即ち
左の圖中不白き更
多其外ハ更不知
らん唯此世界ハ圓
さまのなりとの理
を信トて西の方不
も陸ゆふんと思ひ
案不違ふばみまを
見出しさるあり故

北塔以行末の治乱
の程を國々を中
亞米利加の東方を
群島西印度印
度之所縁なれ嶋を

小猿和土留の嶋と
見ても印度の地續
と思ひしとたれ
一其時嶋人の驚
一方ありて老若男
女濱邊不集る三艘
の船不帆くあり様
と見くまハ白き翼
と廣げさる大化物
ありと思ひしより

西の印度と名けし
昔明應初年の記
世よ所ん高れ古論
武子西の世界が様
し記始て具へし



「猿和土苗亞米利加」
「たし先心まじり見」
「去平海の何んとは」
「夢り元知れは亦の端」
「を印度の端と認免」

西印度の嶋の數九
を一千の氣候冬
ハ何れも熱地味肥
も甚ハ熱地味肥
て産物多し人口合
せて四百萬人此内
六分の一ハ歐羅巴
の人種ホて其餘ハ
黒人ハ又黒白相
混トするも何れも

「人」を告げし由來
「西は印度の名」
「何れ免古今未嘗」
「有矣昔及明人此」
「嶋の名を共傳」

地ハもと西班牙の
領方カモীগ今ハ
獨立國ホて皇帝ハ
黒人ナリ邪麻伊嘉
ハ英吉利領アリ久
場ハ西印度諸島の
中ホて最も大ひカ
そその都と兼羽奈
といふ西班牙ホモ
と領馬濱ハ小カ

了千萬歳ニ嶋の數
の多ク中一書百ノ
身之慣水一石カ
「擇地」邪麻伊嘉久
場馬濱時候熱

き嶋の一群ホて其
數五百のモ猿和土
留も其一嶋あり



此邊の芭蕉ハ實
と結び又ハんかつ

冬初より土地の産物
豊且衣食足ル
今のハ有リ砂糖骨
非錦畑ニ「擇地」多
此芭蕉の實久場

ふろしといふもの
は何も其味よし

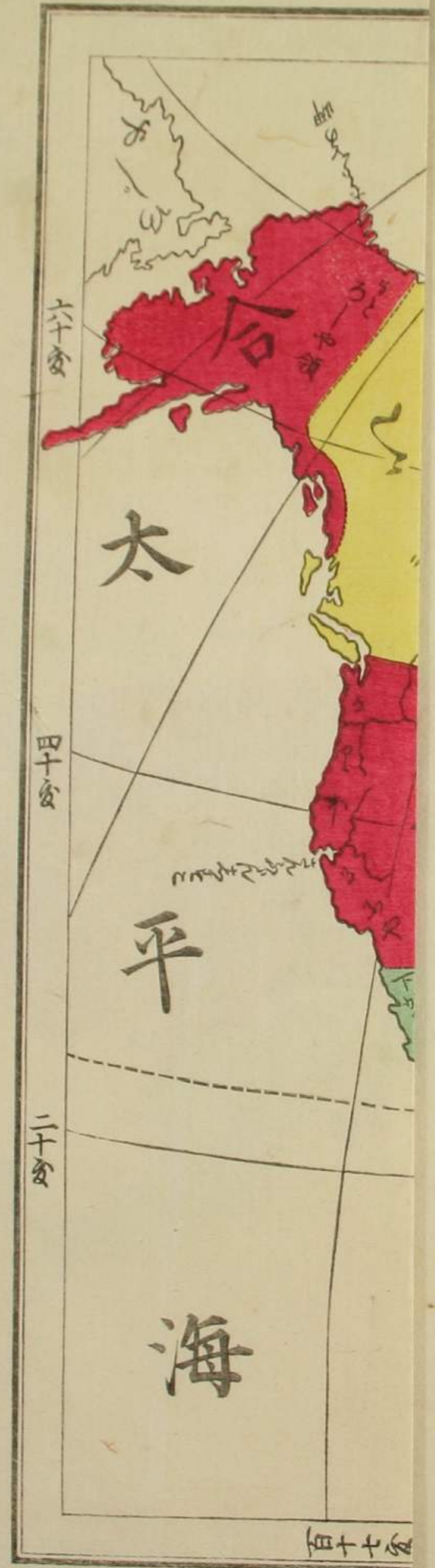


芭蕉



松子の如し

製成する春烟を葉
タバコ
の箱へ
世界各類の石炭
を



北亞米加利洲

